

三十九、敬愛

宗教とは、仏法僧の三宝に対する絶対帰依の生活である。

とくに念仏は、本仏弥陀に対する帰命、合掌恭敬の意である。帰命は如来の大悲招喚の真実によつて成り立ち、合掌礼拝恭敬の身業をその相とする。

この上、如来世尊に対する合掌恭敬の生活は、そのまま横に向かつては、人と人との上に現われて和敬の生活、美しい人生の横の生活を生んでくるのである。具体的に宗教が人生に生きてくるのは、この御同行御同朋としてのわれらの横の生活においてであると言つてもいい。

本仏に対する信心の智慧の曇り、真実教に対する領解の不具足や不徹底は、すぐ人と人との交渉の上に現われてくる。したがって如来に向かつての生きかたの解決は、やがて同朋に向かつていかに生きるかの問題の解決でもある。人と人との生活から仏は生まれないが、仏は人と人との間に生きてくださるのである。

同心一体ということは、国家でも、社会でも、家庭でも、団体でも、必ず成就されねばならない大切な徳である。宗教は人間の上に、この同心一体の世界を成就することによつて、人間の和を真実に実現するのである。すでに曇鸞大師の説のごとく、「同一に念仏して、別の道なきがゆえに、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟とするなり。」

念仏の子は、大慈悲に結ばれる兄弟である。されば、念仏の世界においてこそ、同心一体の徳は成就されるのである。

この同心一体の世界は、決して人間の汚い心、勢力を拡張せんがために、人を所有せんがために、己が利欲や、名聞を成就せんがために等々の、貪欲や、愛着や、利己的な汚い心によつて生まれるのではない。

すべての人は自由におかれなくてはならない。けつして自分のためにせんとして、無理に人を繋ごうとしても、できるものではない。去るものを追わず、とがめず、集まるものと乱れず、それぞれの人がそれぞれの立場に立つて生きつつ、しかも同一清浄なる大法に生かされることによつて、そこに、おのずから同心一体の世界が生まれてくるのである。

仏教においては、信心の智慧が最も尊重せられる。信心の智慧こそは、人間の無明、愚さを克服して輝く、如来廻向の智慧光であり、同時にまた真実教によつて、一切の疑惑、無明、我慢、自力等々の正体を照破、自覚自証せしめて、そこに開けてくる唯一絶対、究竟的目覚めの世界である。

世には、人を無智のままに封じ、無自覚のままにしておき、悪逆放縦のままにしておいて、人をつなぎ、人を集める宗教や思想がある。信心の智慧を重んずる仏教においては、そうしたことが最も嫌われる。

真実なる教えの生きた世界にのみ、自覚を通して必然に同心一体の世界が生まれ
てくる。かの利欲心から門徒の奪い合いをするがごとき寺院には、正しい仏法はず
で滅んだのである。

聖人の御同朋御同行の世界こそは、まことに尊くも清い世界であつた。『改邪鈔』
の中に、

「一。弟子と称して、同行等侶を自専のあまり、放言悪口すること、謂なき事。」
という章がある。その中に祖師の仰せについて

「某はまたく弟子一人持たず、その故は弥陀の本願をたまたしむる外は、何事を教
えてか弟子と号せん。弥陀の本願は、仏智他力の授けたまふところなり。然ればみ
なとも同行なり。私の弟子にあらずと云々。これによりて互に仰崇の流儀を正
しくし昵近じっかんの芳好をなすべしとなり。」

とあり、崇高なる聖人の信の世界が伺われることである。

善にもよらず、悪にもよらず、金錢にもよらず、愛にも、憎にも、その他人間的な
一切によらずして、ただ清浄なる如来大悲により、清白なる法によつて、手を離れた
まま、しかも一つになる。それだけが本当である。愛によつて結ばれたものは、憎
によつて別れてゆくがゆえに。利によつて集まつたものは、利によつて離れるがゆえ
に。仏心のみ永遠に貫きたもう。

宗教は「聖」そのものへの志求であり、聖そのものの体現である。

親鸞聖人は、尊いもの、聖なるもの、真実なるもの、そうした一切を浄土に帰し、
如来に帰して、ひたすら自己の中に、一切衆生の醜いもののみを見出してゆかれた。
愚禿と言ひ、地獄一定と合掌して、真実なるものに向かわれたところには、悪魔の食
い入る微塵の隙もなかつた。聖なるものは、聖なるものとして一切を超え、しかもそ
れが、汚れたるものを無限に聖化し浄化するのであつた。そこには、大地に合掌恭敬
する至れる謙虚があるとともに、如来浄土の金剛不壞の真心があつた。大慈悲があつ
た。

「これによりて互に仰崇の礼儀を正しくし、昵近の芳好をなすべし。」

これまことに、念仏の人と人とのあるべきすがたである。「互に仰崇の礼儀を正し
く」とは敬であり、「昵近の芳好をなす」とは愛である。敬と愛とは、念仏の人と
人とのあるべき正しい相である。御同朋御同行とは、聖人によつてよばれたる、敬愛
の名である。念仏の人と人とは、仰崇の礼儀を守つて、仲よくすべしとの誡め、まこ
とに頂くべきである。昵近とは、親しみ近づくことであり、芳好とは「芳しき好み」で
ある。もし愛あつて敬なくば、芳しき好みは、醜き悪しみと変わり、敬あつて愛なく
ば、温かきわれらの世界は生まれないであろう。

初めて法の席に出でたる人に対して、その無礼をせめ、その至らざるを笑い、さら
に、その人の善を拝むことなくして、これを怒罵し、叱責し、時に寄つてたかつて
巖そごん言をもつて、袋叩きにするがごときは、まことにわれらの世界にあつてはならぬこ

とである。仏法に生きると言いつつ人を仏法より遠ざからしむる法の怨敵となるであろう。敬なければ人は必ず乱る。愛なければ人は必ず和せず。

僧とは和合の義である。その和合に二義がある。

一には理和。これは真如の理を証すれば、和は自然に成就することである。菩薩、聖者に真の和があるのは、同一に真如平等の理を証するがゆえである。

二には事相。見道以前の凡僧の道である。これが六種に説かれてある。いわゆる六和敬である。六和敬とは、一、身相共住、二、口相無諍、三、意相同事、四、戒相同修、五、見相同解、六、利相同均。

以上の六和敬において、仏弟子たちが、礼拝等の身業を同じくし、ともに住みて、その身業の上に和を成就するのが、身相である。次に、讃詠等に至るまで口業を同じくして諍いのないのが口相。次に信心はもちろんのこと、その意業に和を成就してすべての事をしてゆくのが意相、四に、戒を同じく修めて和するのが戒相、五に、見相同解とは、見解を同じくすること、六に、利相同均とは、衣食等の利を同じくすること。この第六を、行相敬、学相敬、施相敬という。修行を同じくすること、布施の行法を同じくすることで、だいたい同じことである。

「法界次第」には「外同他善謂之為和、内自謙卑名之為敬」とあり、思い思いのことをしたのでは「和」は成就しないし、高上りしたのでは、敬ではない。己をへりくだつて、他の善に同心することによって、和敬は成就する。六和敬は、仏弟子の生活相である。

『大無量寿経』には、

「常に広説を欲して志疲倦無し。法鼓を撃ち、法幢を建て、慧日を曜し、痴闇を除く、六和敬を修し、常に法施を行ず、志勇精進にして、心退弱せず、世の燈明と為りて、最勝の福田たり。」とある。

これ、還相の菩薩の徳である。なんたる尊厳な文字であろう。

大経の通序には、菩薩の衆生のために不請の友となる利他の徳を示して、

「不請の法をもつて諸の黍庶(衆生のこと)に施すこと、純孝の子の父母を愛敬するが如し。」

と譬えられた。純とは、精純、純一であり、純厚であり、純大である。てあつくしてまじりなきことである。眞実の子は、父母に対して、念念不忘る親念の愛に生き、親を尊敬して、己を卑謙する。菩薩もまたかくのごとく衆生に向かいたもうというのである。愛敬の菩薩において、いかに尊い徳であるか知るべきである。

家庭は、念仏を中心として、敬愛の道を成就すべきである。親子の間も敬愛であれば、夫婦の間も敬愛であり、兄弟の間もしかりである。念仏の御同朋御同行、もちろん敬愛のまことに生かさるべきである。われらの生活をして、念仏によつて敬愛和敬の光あらしめよ。仏智に照破されて、心内の和敬の怨敵たる邪見高慢を滅ぼし、眞実なる和をわれらの世界に成就せん。

結婚して、新しく家を成さんとする人に、捧ぐ。

「今日初めて嫁ぐ人の子よ。

今日初めて娶る人の子よ。

おん身らは今長き人生の旅路に立たんとす。

雨風荒き日もあらん。山坂峻しき時もあらむ。

ともに合掌して敬と愛とに結ばれて出発せよ。

敬と愛とは和の道なり。

和成つて初めて、妻は我なり、夫は己なり。

敬愛よく一生を貫いて、後に至つて乱ることなかれ。

家を地獄への門とするか、家を浄土への道場とするか。

念仏なくんば妻(夫)は輪廻なごだちの媒、子は三界くびかせの枷かぎたらん。

ただ釈迦親鸞の教えに順い、念仏中心の生活を成就せよ。

如来の大悲光明のみ、愛欲を浄化して、互いに同行善知識たらしめたもう。

人間出世の本懐は、ただ真実の教行証を敬信して、不滅の大道を顕彰するにあり。

今に至つて静かに父母祖先の広大なる恩を憶い、その深き慈愛を謝せよ。

ああ。かくして、不滅の光、永遠に御身らの上にあれ。」